

ブドウ黒とう病対策について（第2報）

令和5年7月6日

農業技術課

シャインマスカットを中心に「黒とう病」の発生が多くなっています。本病は、雨水により感染が広がり、多発すると収量に影響することもあります。

また、本病は伝染から発病までの期間が短く、特に新梢先端や副梢等の柔らかい部位では、数日で病斑がみえるようになります。

7月1日には県内で強風を伴う降雨（甲府18mm、勝沼33mm）があるなど、梅雨期には今後も被害の拡大が心配されます。圃場の病原菌密度を下げ、今後の発生拡大を抑制するため、以下の対策を徹底して下さい。



図1 葉における初期の症状(中央部が黒褐色、周囲が黄白色の斑点)

<耕種的防除>

- ①定期的に園内を見回り、病斑がある葉や新梢、果実、巻きひげは見つけ次第取り除き、園外に持ち出し処分する。
- ②本病は、新梢先端や副梢、巻きひげ等、柔らかい部位に発生が多く、本年発生している部位や、昨年度の巻きひげや枯れ枝の残っている周囲に感染が広がっているため、これらの周辺十分に観察し、発病している部分や巻きひげ等を除去する。
- ③カサかけや袋かけは、房への感染を防ぐ効果が高いため、未実施の園は早期にカサかけ・袋かけを行う。

<薬剤防除>

- ①摘粒作業中で、本病の発生がみられる園では、フルーツセイバー1,500倍（使用回数3回、収穫7日前まで）またはオンリーワンフロアブル2,000倍（使用回数3回、収穫前日まで）を棚下から散布する。

※果粒が大きい場合、薬剤による汚染が発生する恐れがあるため、生育状況に注意し、他の薬剤との混用は避ける。

②袋かけが終了している園では、防除暦に準じ、袋かけ後なるべく早く I C ボルドー 66 D の 40 倍を散布する。

③薬剤散布を行う際は、散布ムラのないよう十分な量を丁寧に散布する。特に圃場の周囲や S S の死角など薬剤がかかりにくい場所は補助散布を行う。

④薬液が十分に付着するよう、棚面を明るくし風通しの良い状態に保つよう新梢管理を徹底する。

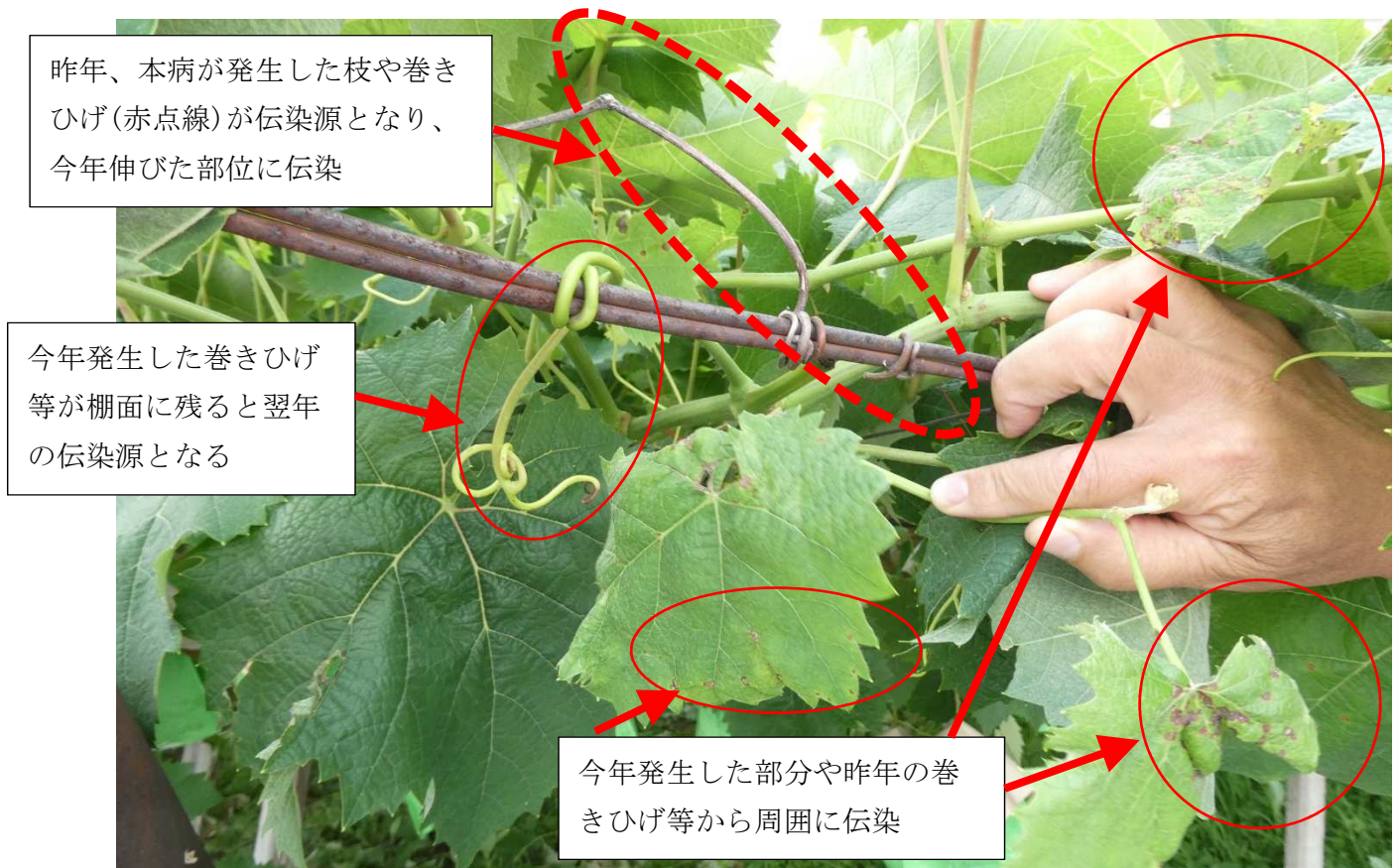


図 2 圃場内での黒とう病の伝染 (令和 5 年 7 月)

※圃場における病原菌の密度を下げるため、発病部位(副梢や巻きひげ等)の除去を徹底する。また、今後の発生を少なくするため、新梢管理を徹底する。

※気温が高くなると黒とう病の発生はいったん少なくなるが、秋になり気温が低下し秋雨が続くと再び発生するため、定期的に園内を観察し発生状況に注視する。

※シャインマスカット以外に、甲斐ベリー7や甲斐路などは本病の発生が多いため、防除対策を徹底する。(植え付けて間もない苗木への発生にも注意する。)